

2020年
春・夏
4月～7月

パリ日本文化会館だより

春の気配を感じる
エッフェル塔



パリ日本文化会館・日本友の会会員企業の皆様におかれましては、
新型コロナウィルス感染拡大による苦境の中、継続して当館をご支援いただき深く感謝申し上げます。
パリ日本文化会館の活動状況を、一部ですが「会館だより」としてご報告申し上げます。

ロックダウンの中 新年度の開始

フランスでも新型コロナウィルスがじわじわと感染拡大を始める中、3月13、14日に、ダンサーの島地保武とラッパーの環ROYによる『ありか』公演を、政府の指示により急遽収容人数を減らして実施しました。公演最終日に当たる14日夜、マクロン大統領のテレビ演説にて移動の自粛、週明けには再度大統領より厳しい移動制限措置(いわゆるロックダウン)が発表され、職員も出勤が困難な事態の中、新年度を迎えました。3月末には杉浦勉館長が退任・帰国し、次期館長就任までの間、館長業務は姫田美保子館長事務代理が引き継ぐこととなりました。



「ありか」パリ公演

新しいオンライン事業の開始

LE・STUDIO



大駱駝艦 膜赤兒さん



アニメーター/アニメーション監督 りよーちもさん

当初「15日間」とされたロックダウンの期間は延長され、またウィルスの影響は長引くことがわかつてきました。当館はFacebook、Twitterなどで、様々な日本文化についてのコンテンツの紹介、発信を続けるとともに、新たなオンラインによる文化発信コンテンツの制作を開始しました。当館スタッフが普段の担当業務の枠を超えてアイデアを出し合い、テレビ会議などで意見を交換してプランを立てました。

5月にロックダウンが解消すると直ちにウェブ動画シリーズ「Le Studio」(ル・ステュディオ)の制作を開始しました。会館内に作った収録用の特設スタジオをベースにさまざまな切り口でフランスの皆さんに日本文化を発信するものです。大駱駝艦の膜赤兒さんのオンライン出演を皮切りに日本の近現代美術、写真、アニメ、マンガなど、様々な分野のフランスと日本の専門家を招いて日本文化を紹介しています。

この他、フランスの高校生・大学生などの若年層をターゲットに、ポッドキャスト番組「Miso Point」(ミゾポワン)も開始しました。先入観や幻想で語られがちな日本文化や日本社会について、専門家とともに解説していく情報発信をしています。

オンラインを活用することで日本文化発信をパリに住む人だけでなく、より広い地域のより多くの人々に日本文化をお届けすることができました。今後の活動に活かしてまいります。



「Le Studio MCJP」で検索！

2020年
春・夏
4月～7月

パリ日本文化会館だより

夏の気持ち
よい日差し!



日本語教育分野では、学校が休校となり急にオンライン授業を実施しなくてはならなくなった日本語教師のための遠隔授業サポート講座を、3月半ばから急遽オンラインでスタートしました。12週間にわたり130セッション実施、のべ1300人近い教師の方々が、フランス国内のみならず、近隣他国からも参加しました。さらに、7月には欧州10か国の日本語教師を対象にオンラインで研修会を実施しました。

カリタス女子高等学校の発表
「デラシネの画家、藤田嗣治のエスプリに学ぶ」

また、フランスで日本語を学ぶ高校生が、テーマに沿った発表により学習成果を披露する「第4回全仏高校生日本語プレゼンテーション発表会」を3月に、今回も特別参加として、日本でフランス語を学ぶ高校生に渡仏してもらい、同年代の生徒同士での交流を加えて実施予定でした。しかし開催中止となつたため、5月に、オンライン上での実施となりました。フランス各地の4校、日本からはフランス語教育振興協会によるコンクールで選ばれたカリタス女子高等学校（神奈川県）の高校生が参加、日仏の各チームがそれぞれ工夫して「私たちの考える日仏交流」について発表しました。時差のため限られた時間ではありましたが、それぞれが外国語学習を通じて交流できる貴重な機会となりました。



そして、「日仏交流俳句コンクール『離れていても-withコロナで頑張る世界に俳句でエール』」をオンライン上で展開しています。日本語、フランス語で俳句を作り、俳句を通じてこの困難な状況下でつながりましょう、励ましあいましょう、という趣旨です。

日本発祥の俳句は国際的にも広がっています。フランスでは学校教育でも取り入れられているケースがあるなど、HaikuはSushiなどと並んで、日本文化を象徴するものになっています。当館が場を提供して、俳句を発表したい、人と人をつなげたい、という想いです。

俳句コンクールの専用ホームページを設け、友の会事務局からも会員の皆様にもご案内頂いたり、朝日新聞に公告を掲載頂いたりもした結果、1700句の応募がありました。日仏だけではなく、様々な国からも応募いただいております。選考とその後の広報を通じ、さらに多くの方とつながり、withコロナ社会に向けて意義のある活動にしてまいります。



6月初め、制限つきながら会館を再開できることになり、地上階の展示「和フリカ」(会期延長)、図書館(予約制貸出し)、そして地上階のショップ(テナント)「タクミ・フレーバーズ」も再開しました。

さらに、子供向けの日本美術入門書「WAKU WAKU ワクワク 日本美術を発見しよう」を発刊しました。これまでの当館での展覧会に出品された作品を中心にテーマごとに紹介し、楽しく若年層に日本美術を発見してもらおうと当館で作成したものです。パリの若年層向け専門書店のウィンドウにも並べられていました。

そして8月、当館は例年どおり夏季休みとなり、一般のお客様には閉館ですが、スタッフ一同秋に向けての準備を続けました。

このコロナによる特別な時期は、文化の意味を再発見する機会となりました。外出制限の下、ベランダで歌ったりダンスしたりして励ましあうフランス人の姿もありましたが、文化はもともと人の心を結びつける役割があります。

フランスは個人主義的な国ですが、その中にあって「Solidarité」(連帯、助け合い)の心で苦しい状況を戦ってきました。日本でいう「絆」につながるものだと感じました。そして、絆を文化がはぐくみます。